

# 目次

はじめに 山田馨

## I \* 詩の誕生

1

初めて書いた詩（一九四二・一九四八）——「模型飛行機」「青蛙」

五年生のときの詩

模型飛行機づくりという原体験

武蔵野の自然

読者を意識しはじめた詩

詩がうまくなる

003

2

一〇代の詩（一九四九—一九五二）——二冊の大学ノート

思春期の日々

ノートの運命

模型飛行機みたいな詩

処女詩集の誕生

文壇への登場

039

042

046

050

054

## II \* 青春の詩

3

『二十億光年の孤独』（一九五二）——「二十億光年の孤独」「かなしみ」「はる」

ユーモアのセンス

他者がいない世界

ことばが勝手につながる

思春期のダークサイド

遠い波の音

できちゃった詩

賢治の影響

神さまの居場所

060

065

070

072

075

079

082

087

4

『六十二のソネット』（一九五三）——「49」「62」

お筆先とソネット

コスモスからあらわれた恋人

詩を感じた原体験

「世界が私を愛してくれる」という感覚

私がいなくなる

家出

結婚

私性と時代性

091

095

100

102

104

109

112

113

Ⅲ \* 人々と  
生活の発見

『愛について』(一九五五)——「愛について(私はみつめられる私)」	5
女性から他者を発見する	118
愛による世界の見取り図	120
読者とつながりたい	123
自分の愛を疑う	126
微妙なとき	132
二つの愛	134

6 『絵本』(一九五六)——「家族」

理想の家族像	137
家族という根拠地	143
自費出版	146
離婚、そして再婚	151

7 『あなたに』(一九六〇)——「頼み」

私の嫌いな谷川俊太郎の詩	154
荒波	161

8

『落首九十九』(一九六四)——「除名」「あいさつ」	8
初めての仕事は請けてみる	166
ことばを並べるだけで詩になっちゃう	172
豊富な物欲	175
時代のことば	177

9

『21』(一九六二)——「ボエムアイ」	9
現代詩人としての登場	182
解釈ごっこ	186
衰弱した書き方	193

10

『旅』(一九六八)——「鳥羽 1」「鳥羽 3」	10
転換点の詩	195
意識の下へ	202
幸せな家族	204
六五年という時代	208
老婆との出会い	212
現代思想の最前線	216
草木の名前	219





VII  
\* 沈黙から

28	『クレーの天使』(二〇〇〇)	482
	——「天使というよりむしろ鳥」「泣いている天使」「現世での最後の一步」	
	クレー晩年の絵	485
	スタッガリング・エンジェル	487
	そのときの詩人	491
	マザーグースの老女	491
27	『みんなやわらかい』(一九九九)	461
	——「こ」『ピアノをひくひと』『しぬまえにおじいさんのいったこと』	
	コップは歩けない	464
	ピアノから生まれた詩	470
	ラブストーリーの結末	467
	詩への疑い	476
	「沈黙の二〇年」	476
	デタッチメントの愛情	449
	子ども時代の情	452
	自己否定の詩	453
	別れ	459
26	『世間知ラズ』(一九九三) —— 「父の死」「世間知ラズ」 事実と詩	443
25	『メランコリーの川下り』(一九八八) —— 「メランコリーの川下り」 鬱という洞察力	436
	三つの目	441
24	『女に』(一九九二) —— 「未生」「なめる」「会う」「川」「唇」「電話」「墓」「後生」 誕生前から死後までをうたう 詩の発表朗読会 そう思いたい気持ちで書く 「なめる」という世界体験 出会って 偕老同穴	414
	嘘とほんとう	395
	小学生のゲイ	400
	はるかなるトラウマ	406
	二冊の美本	410

VIII  
\* いのちの  
草むら歩き

	32		29
『すずき』(二〇〇六)		『minimal』(二〇〇二)——「小憩」「拒む」「座る」「泥」「うらた」	
——「きらびやかなる」「おばあちゃんとおひろこ」「ことばがつまみくぐり」「はこ」「ぼん		沈黙に近いものを……	494
『はだか』の反響……	573	エコ詩の可能性……	498
子どもと死……	576	蘇州の古寺で……	499
子どものための言語論……	580	九・一一ニューヨーク国際貿易センタービル……	503
ベートーベンのとモーツァルト的な詩作……	584	ありのままのありがたみ……	507
ネガティブ・ケイパビリティ……	590	老人と幼児……	512
		極上の恋歌……	514
		『夜のミッキー・マウス』(二〇〇三)	
		——「夜のミッキー・マウス」「なんでもおまんこ」「無口」	
		表題詩の位置……	518
		真実の鼠……	521
		性を越えた「おまんこ」の詩……	523
		世界全体と一つになる……	528
		自画像の変化……	529
		詩の選別と等級……	533
		詩の文体……	536
		身体術への目覚め……	539
		シンブルライフ……	542
		呼吸法と詩……	545
		『シャガールと木の葉』(二〇〇五)——「シャガールと木の葉」「百歳になって」「はな	
		物語的な要素……	552
		対語の発見……	555
		死とユーモア……	559
		老いの創造性……	563
		時空がほどける……	567
		現実の世界を超えて……	570

『子どもたちの遺言』(二〇〇九)——「ありがとう」「うまれたよ ぼく」	35
コンセプトの逆転	679
表情の力	683
宗教の境地	685
いのちの表情	689
子どもの目と大人の目	694
瞬間芸から物語へ	647
臨死をルポルターージュする	650
死出の旅の風景	653
無性にわびたい	658
映画の手法	660
気になる表現	665
「人っ子ひとりいない場所を自分の心の中につくる」	666
書きはじめないとわからない	669
魂の次元を生きる人	672
ラストシーンの力	675

『私』(二〇〇七)	33
——「自我介绍」「私」に会いた」「さようなら」「母に会う」「あのひと」「泣いているきみ」	596
事実というフィクション	602
語りかける詩	604
二つの「私」	608
波動と粒子	611
臓器との対話	617
老母と幼女	621
二つの詩の世界	624
音楽を聴きながら書いた詩	626
詩があつかうべきもの	631
詩の純情	635
『トロムソコラージュ』(二〇〇九)——「トロムソコラージュ」「臨死船」「この織物」	34
二つの新しい特徴	636
長編詩のきっかけ	639
六種類の物語性	641
コロキアルな詩	645
英語で書かれたオチ	647

本書は、以下の八回にわたって、練馬の割烹居酒屋「にわの」で行われた対談に手を入れたものである。

- I \* 詩の誕生……………二〇〇七年一〇月七日(火)
- II \* 青春の詩……………二〇〇七年一二月一九日(水)
- III \* 人々と生活の発見……………二〇〇八年四月二日(水)
- IV \* 現代詩の前線へ……………二〇〇八年六月一日(水)
- V \* にほんごの源へ——ひらがな詩の冒険……………二〇〇八年七月二九日(火)
- VI \* 生きることの深み……………二〇〇八年一月二一日(金)
- VII \* 沈黙から……………二〇〇九年一月二八日(水)
- VIII \* いのちの草むらを歩く……………二〇〇九年四月一五日(水)